

心からそう思った。「ありがとう」はまほうの言葉だ。言われるとうれしくなる。でも、それだけじゃない。相手を大切に思うからこそ出てくる言葉だ。マリと彩のように、おたがいを信じているからこそ、心から「ありがとう。」といつでも言えるようになりたい。みんなが大切だから。

小学生 高学年の部
本川根小5年 宮島光樹
建具職人の千太郎

(ちゃんと働けるかな。)
大工の健喜に連れていかれたとき、千太郎は、とても不安だっ
たと思います。
「江戸時代って、本当にぎびしい時代だな。」

おこは十才、千太郎は七才。これは二人が健喜に奉公に出されたときの年です。今の時代で言えば、まだ小学生、ぼくより年下です。小さくても、家がびんぼうなので、奉公にでなければなりません。この時代は、千太郎たちのように、家の都合で幼いうちから親とはなれて生活しなければならぬし、うでをみがいて自分で生きていかなければならない時代でした。

中学生の部
中川根中学1年 山下翔太

奇跡のプレーボール

「大丈夫かなあ」
この「奇跡のプレーボール」という本を手にした時、正直感想文を書けるかどうか心配だった。野球については、ルールは知っているが、どちらかと言えば、興味は無かった。だが、この本は太平洋戦争の事について書いてある事を知り、戦争の事や歴史の事は興味があったのでこの本を選んだ。

この本の内容は大まかにまとめると次のようだ。この本の著者である大社さんのもとに三十年前の友人である石田さんから手紙が届く。石田さんはニューヨークのテレビ局に勤めていて、フロリダの平均年齢八十歳の野球チームを取材した時に、その野球チームのメンバーでアメリカ軍の兵士として日本軍と戦った経験のある人から、「戦争は終わったが決着がついたわけではない。野球で決着をつけたい。」と言われ、NPOで働いている大社さんに手紙を出した。そして、老人野球について調べた後、日本での選手を集めるために奔走しながら、試合をするための



高校生・一般の部 特選
植村雅紀 (川根高校2年)
いのちの食べかた



中学生の部 特選
佐藤翔太 (中川根中学校3年)
伝記ダーウィン



中学生の部 特選
中村夏帆 (本川根中学校3年)
がんばれば、幸せになれるよ



中学生の部 特選
松井果歩 (中川根中学校2年)
ぼくの羊をさがして



中学生の部 特選
前川裕音 (本川根中学校2年)
きな子日和



中学生の部 特選
山下翔太 (中川根中学校1年)
奇跡のプレーボール



小学生高学年の部 特選
中村大翔 (中川根第一小6年)
運動会は〇秘作戦で



小学生高学年の部 特選
松山怜奈 (本川根小6年)
リキシャガール

でもこの本を読み進めていくうちに

「千太郎って、すごいな」と思うようになりました。それは、千太郎がいつも自分のできていることを一生けん命やろうとしているからです。寺子屋の解体を手伝いにいったときも、亀吉と幸吉は遊んでいるのに、黙々と柱を運んでいました。かんなをかけるとき、机を作るときも同じです。不器用でうまくできないのに千太郎は「やるしかない。」いつもそんな気持ちでいっぱいです。

ぼくは、少年野球のとき、コーチからいつも言われている言葉の思い出しました。「グラウンドに出たら、大きな声を出すこと、いつも全力で走ること、下手でもいいから自分ができることを一生けん命やろう」
できないことは、また練習すればいい。いつもあきらめず、できることを全力でがんばることが大切で、それができる人はほとんどうまくなる人なのです。ぼくは、グラウンドでエラーや三振をして泣きたい気持ちになることもあるけど、コーチの言葉を信じていつも全力でプレー

をするように心がけています。

うまくできなかったかなを毎朝練習してかけられるようになったとき、そして自分で机を作り上げたとき、千太郎は飛び上がるくらいうれしかったと思います。ぼくも、野球で全然打てなかつたけど、でも毎日素振りを続けました。初めてヒットを打ったとき、本当にうれしかったことを覚えています。でも、それは自分の力だけでできたわけではありません。千太郎に名主さんや若旦那がそつと力をかしてくれたように、必ずがんばっている姿を見ていてくれて、応援してくれる人がいるのです。ぼくの周りにも、いつもやさしく教えてくれる監督やコーチ、家族がいます。きつとぼくの姿を見てくれていて、「洗樹、いいぞ、がんばれ」と力を分けてくれていたのだと思います。

ぼくは、まだ五年生。これからもいろいろなことに挑戦し、多くの人に教えてもらいながらたくさんのかんことを身につけていきます。そして、千太郎から教えてもらった「自分でできることを一生けん命がんばる」ことをいつもわすれないようにしたいと思っています。

資金集めや準備に追われながらも次々と奇跡が起こり、ついに二千年十二月十九日に日米での対戦が開かれた。他にも数名の日本人への戦争についてのインタビューが書かれている。今では考えられない悲惨な時代だったという。

この本は今までに絶対に知らなかつた兵士達の気持ちがわかる文がたくさんある。この本に出てくる人達は太平洋戦争中、高校生や中学生だったのにも関わらず、戦場に出され、必要ならば命を捧げる事が当然とされた時代だったと言う。今の時代ではとても有り得ない事だ。まだ遊んだり、勉強したりする時期であるのに戦場に行くのは怖く、自分なら戦場に行くのは嫌だ。だが、戦争中では誰もが国のために死んでいくのだから、度胸があるなど思っただけで、度胸があるのではなく国のために働くという指名感が強かつたと思う。とても今の自分には考えられない事だ。次に、試合をするハワイに両チームが集い、両チームの選手同士が話をする場面で自分の印象が変わった。日本人選手が自分は零戦のパイロットだったと言い、アメリカ人選手

は自分の乗っていた戦艦は零戦に攻撃されたことがあるとストリートな言葉で言った。そしてお互い生きていて良かったと言った。これに対し、日本人もうなずき、手をにぎり、同じ人間だ、何も変わらんと云った。二人はかたく手をにぎり合つた。この会話の中でアメリカ選手の人は一言も攻撃された事に対しての恨み事を言っていない。自分なら相手に恨み事を言い続けると思う。だが、アメリカ人は何も言わないのでとても不思議に思う。しかし、それはアメリカ人が相手は自分から好んで攻撃してくるのではなく国の命令で仕方なく攻撃してくるのだ。自分たちも同じように国に従い命令された通り攻撃した。だから互いに許し合おうと考えていたのだと思う。終戦から六十年以上たつてお互いを重ねた事と平和になつた今だから、かつて敵だった人と明るく話す事ができたのだと思う。戦争中のアメリカ人は無害な民間人を殺した鬼のような人達だと思つていた。でも、この会話を読み自分の中で考え方が大きく変わった。

その後、両チームは、試合当日の午前中に日本軍の戦没者が

「ありがとう」はまほうの言葉だ。言われるとうれしくなる。でも、それだけじゃない。相手を大切に思うからこそ出てくる言葉だ—
山本愛佳

The life having a book is pleasant
—本があると、人生は楽しい—

